

緑色も濃くなるこの季節、屋外での活動が気持ちの良い時期となりました。それは人間のみならず動物たちもきっと同じ気持ちだと思います。

ご存知の通りお釈迦様は出家される前は一国の王子として将来を嘱望^{しよくぼう}された方でした。当時のインドでは国を治める者として武術の訓練は必須の事です。それは他者との争いを意味します。その事への嫌悪感も出家の一因と言われています。武術の訓練の中には馬の調教も含まれていたに違いなく、その経験が人びとを教え導く方法のヒントになったのかもしれませんが。それはお釈迦様の事を讃^{たた}えた表現である「調御丈夫^{じょうごじょうぶ}」、つまり優れた調教者、導き手をあらわす言葉として伝えられています。

道元^{どうげん}禅師は経典^{きょうてん}に伝わるお釈迦様の言葉を元に、馬の調をお釈迦様による弟子への指導と重ね、仏法に出会う私たちの姿を『正法眼蔵^{しょうぼうげんぞう}』の四馬の巻、四つの馬にたとえてあらわしています。

ひとつめは、鞭^{むち}の影を見るか、或いは毛に鞭が触れただけで動きだす馬。これは見知らぬ他人の死を聞いて仏法^{ぶつぽう}を志す者。

ふたつめは鞭が毛や皮に触れることで動きだす馬。これは知り合いの死を聞いて仏法を志す者。

みつつめは、鞭が肉に触れることで走りだす馬。これは親の死で仏法を志す者。

よつつめは、鞭が骨身^{ほねみ}に染みることで漸^{ようや}く走りだす馬。これは自分の死に直面して仏法を志す者。

我々の人生には様々な段階があります。生まれ落ちた時、老いを感じた時、病と向き合う時、死を目前とした時など。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

道元禅師は仏法との出会いの段階を四つの馬に例えています。出会いが早いかわいいかでそこに優劣はないとしています。

また仏法の伝え方も大切です。本来相手を ^{ととの} 調べ、導く手段であったはずの鞭も、使い方を間違えるといつの間にか強制する武器へと変わってしまいます。

同じように ^{しつけ} 躰や道徳と呼ばれるものでさえ、使い方を間違えると脅しや強制の ^{いちよく} 一翼 ^{にな} を担ってしまう事もあるかもしれません。

道元禅師は四馬の巻の最後に、「生 ^{しょうろうびょうし} 老病 死という人生の避けがたい現実を目を向けさせるのは、それから離れさせる為ではなく、人びとに仏の最高の境地を示さんが為である」と説いています。

教え導くあり方にも心して望むべきです。

— 終 —